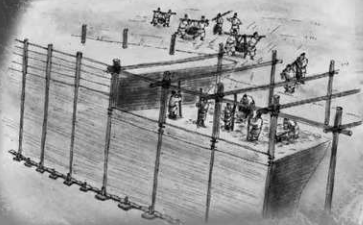


渡来系技術から見た 古代山城・鞠智城



令和4年
10月23日(日)

会場：くまもと県民交流館パレア 10階パレアホール
熊本市中央区手取本町8-9 テトリアくまもとビル10F



主催：熊本県・熊本県教育委員会 共催：明治大学日本古代学研究所
後援：山鹿市教育委員会・菊池市教育委員会・熊本県文化財保護協会・
菊池川流域古代文化研究会・肥後古代の森協議会

鞠智城シンポジウム

「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」

日時：令和4年（2022年）10月23日（日）12：50～17：00

場所：くまもと県民交流館パレア10階パレアホール

（熊本市中心区手取本町8番9号テトリアくまもとビル10階）

主催：熊本県・熊本県教育委員会

共催：明治大学日本古代学研究所

後援：山鹿市教育委員会・菊池市教育委員会・熊本県文化財保護協会・菊池川流域古代文化研究会・肥後古代の森協議会

一日程

12：00 開場

12：30 開催前行事

12：50 開会挨拶

主催者挨拶 熊本県副知事 木村 敬

明治大学日本古代学研究所所長 石川 日出志 氏

来賓紹介

13：00～13：20

報告①「鞠智城の渡来系技術」長谷部 善一（歴史公園鞠智城・温故創生館館長）

13：20～14：00

報告②「渡来系の土木技術とため池・山城」小山田 宏一 氏（大阪府立狭山池博物館館長）

14：00～14：40

報告③「古代建築と渡来系技術」海野 聡 氏（東京大学大学院工学系研究科准教授）

（14：40～14：55 休憩）

14：55～15：35

報告④「渡来系技術の導入と古代山城」吉村 武彦 氏（明治大学名誉教授）

（15：35～15：40 休憩）

15：40～16：50 パネルディスカッション

コーディネーター 佐藤 信 氏（くまもと文学・歴史館館長、東京大学名誉教授）

コメンテーター 亀田 修一 氏（岡山理科大学特任教授）

パネリスト 小山田 宏一 氏（大阪府立狭山池博物館館長）

海野 聡 氏（東京大学大学院工学系研究科准教授）

吉村 武彦 氏（明治大学名誉教授）

長谷部 善一（歴史公園鞠智城・温故創生館館長）

16：50 閉会（～17：00）

報告者、パネリスト、コーディネーター、コメンテーター紹介

【報告・パネリスト】

小山田 宏一（こやまだ こういち）

同志社大学文学部文化史学科卒業。大阪府教育委員会文化財保護課考古学技師、大阪府立弥生文化博物館学芸課長、大阪府立狭山池博物館学芸員、奈良大学文学部文化財学教授を歴任。現在、大阪府立狭山池博物館長。専門は考古学。

論文に、「古代日韓補強土工法の俯瞰的整理」、「三国から朝鮮時代前期にかけての溜池の類型とその歴史的背景」、「古代の開発と治水」等多数。

海野 聡（うんの さとし）

東京大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退。（独）国立文化財機構奈良文化財研究所を経て、現在、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授。専門は日本建築史・文化財保存。博士（工学）。

著書に『古建築を復元する一過去と現在の架け橋』、『建物が語る日本の歴史』、『日本建築史講義—木造建築がひもとく技術と社会』、『森と木と建築の日本史』等多数。

吉村 武彦（よしむら たけひこ）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学文学部助手、千葉大学専任講師・助教授・教授、明治大学文学部教授を歴任。現在、明治大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

著書に『日本古代の政事と社会』、『蘇我氏の古代』、『大化改新を考える』、『日本の古代の社会と国家』等多数。

長谷部 善一（はせべ よしかず）

平成3年4月に熊本県教育庁入庁。熊本県立装飾古墳館、熊本県教育庁文化課課長補佐を経て、令和4年4月より熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館館長。

【コーディネーター】

佐藤 信（さとまこと）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所（平城京跡調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部教授、東京大学大学院人文科学研究科教授、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事を歴任。現在、くまもと文学・歴史館館長、横浜市歴史博物館館長、東京大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

著書に『古代史講義』、『日本古代の宮都と木簡』、『出土資料の古代史』、『古代の地方官衙と社会』、『列島の古代』（日本古代の歴史6）等多数。

【コメンテーター】

亀田 修一（かめだ しゅういち）

九州大学大学院文学研究科修士課程修了。岡山理科大学助手・講師・助教授・教授を歴任。現在、岡山理科大学生物地球学部特任教授。専門は、東アジア考古学。博士（文学）

著書に、『日韓古代瓦の研究』、論文に「西日本の渡来人」、「神龍石系山城と朝鮮半島の山城」、「朝鮮半島における造瓦技術の変遷」等多数。

（敬称略）

鞠智城跡の渡来系技術

歴史公園鞠智城・温故創生館館長 長谷部 善一

1 はじめに

鞠智城跡の保護施策は、昭和34年（1959年）の長者山礎石群、深迫門礎石の確認を受け「伝鞠智城跡」として県の史跡指定を皮切りに、昭和40年代の発掘調査成果を踏まえ、昭和51年（1976年）に鞠智城の位置が確定するに至り、指定名称を「伝鞠智城跡」から「鞠智城跡」に変更した。平成16年（2004年）には国により「我が国の歴史を語るうえで重要な遺跡」として、国指定の史跡に指定され、更なる高みによる保護が図られた。

本稿では、これらの保護の過程で明らかにされてきた古代山城としての鞠智城の価値を示す「渡来系技術」について、これまでの研究成果をもとに報告する。

2 鞠智城に遺る渡来系技術

鞠智城跡の発掘調査は昭和42（1967）年度の第1次調査以降、令和4（2022）年度までで37次を数え、城門跡、土塁線、管理・行政機能を司る建物群を擁する平地と建物群、そして国内の古代山城では初めての確認事例となる貯水池跡など多くの調査成果が得られてきた。

ここでは、これまでの発掘調査の結果や、鞠智城シンポジウム及び鞠智城跡「特別研究」で、朝鮮半島に由来する渡来系技術として指摘されてきた、各遺構について紹介し、この後の報告につなげたい。

（1）鞠智城の「選地」

鞠智城は、菊池川沿いの菊池平野と内田川沿いの菊鹿盆地の両方を望む位置に所在する。鞠智城が築城され役割を終える時期には、8世紀～9世紀代を中心に、鞠智城を望む地域に官衙的要素を有する遺跡が現在までに、4ヶ所知られている。その他、全容は把握されていないが官衙的要素を有する可能性が高い遺跡として、掘立柱建物や火葬墓を確認している赤星福土遺跡（菊池市）、竪穴建物、掘立柱建物を確認され、越州窯系青磁が出土している赤星水溜遺跡（菊池市）がある。全面調査をおこなうとその数は増えてくると考えられる。

そのうち鞠智城に最も近い位置には、土塁が巡り多量の布目瓦が出土し「菊池郡家」と推定される西寺遺跡（菊池市）、うてな台地南側斜面上に塔心礎が残り、西に金堂、北に講堂を持ち法起寺式の伽藍が推定され、さらに鴻臚館式瓦を出土し「菊池郡寺」と推定される十蓮寺遺跡（菊池市）、官衙的要素の一つとされる「コ」の字に並ぶ掘立柱建物群の存在が確認されている御宇田遺跡（山鹿市鹿本町）並びに同じく「コ」字に掘立柱建物群を持つ「上鶴頭遺跡」（菊池市七城町）などが知られてきた。

その後、平成に入り、うてな台地上の圃場整備事業で一部が調査され、うてな遺跡七枝地区から多数の竪穴建物と共に20棟を超える掘立柱建物が検出され、三彩壺や銅椀片並びに墨書土器が出土しており、官衙関連の集落が展開していたと想定されている。また、近年、鞠智城近くを通る官道の「車路」ルート近くで、9世紀初頭の掘立柱建物群を検出した赤星

石道遺跡(菊池市)の調査がおこなわれるなど、鞠智城取り巻く遺跡が知られてきている。

このような現在知られている官衙的を持つ遺跡はすべて、凝灰岩台地の平坦地を選地するか、菊池川河岸段丘の平坦地を利用して立地している。これらは例外なく、他の役所や集落を見通す位置を選地しており、車地を通じ連携できる位置に選地している。

それに比べ鞠智城は現在知られている3つの城門はもとより、米原台地の建物群など、これら他からの視点を遮断するかの場所に建設され、かろうじて長者山、灰塚など「烽火」を置いたであろう場所だけが周辺を遠望できるが、外部からその位置を正確に求めることは難しい。

それではなぜ、重要な官衙や拠点集落がうたな台地や河岸段丘上に作られてきたにもかかわらず、鞠智城だけは外から見えない低山地内に選地されたのか。おそらく、この選地こそが、渡来系官人による選地思想の一つと考える。

濱田耕策氏は平成21年の鞠智城シンポジウム¹で、「鞠智城を「くち」と読む『日本書紀』の古訓を糸口に鞠智城の築城者層について考察されており、筑紫の二つの山城と連携するこの鞠智城の「鞠智」が築城に際してその土地の選定に始まる築城プランナーとして城名に名を遺すほどの貢献をなしたものと考えられる」とし、百済官人のそれも上位の官位を持ち、佐平や達率を帯びた亡命官人の関与を指摘されている。このことから、鞠智城の最もそして最大の渡来系技術は鞠智城の選地そのものと考えられ、渡来系(百済)官人の関与を示唆している。

(2) 城門

現在、鞠智城内で知られ超背により確定している城門は3ヶ所である。いずれも城城の南側土塁線上に、東から深迫門、堀切門、南側土塁線と西側土塁線の接点近くに池ノ尾門がある。これまでの発掘調査で城門の向きが確定もしくは想定される方向は、深迫門は東向き、堀切門は南向き、池ノ尾門は西向となる。このうち、深迫門と堀切門は包谷式を取る選地の条件から、周囲の平坦地もしくは車路へ抜けるルート上には深い谷を有する。唯一、西を向く池ノ尾門は菊鹿盆地を横切る車路や、河川交通として川湊が想定できる菊池川や木野川から谷を隔てることなく入ってこられる城門である。おそらくは城内に搬入される米をはじめとする物資の搬入口としての役割を担っていたと考えられる。のちに報告するが、貯水池跡から出土した鞠智城初の文字資料である木簡も荷札として付けられた状態でこの城門を経由し持ち込まれたものと考えられる。

また、この池ノ尾門は、現在の福岡県八女市から国道3号を経由する湊谷を辿ると最短距離で大宰府方面とを結ぶルートとなる。現在知られている車路・延喜式官道で想定されているルート上には乗らないが、大野城・基肆城の後方支援基地としての役割を考えるとこのルートの存在も生きてくるのではなかろうか。更に、鞠智城には城城の北側、現在の米原集落近くに北門の存在も指摘されている。これまでの調査では確認されていないが福岡県方面に向けての城門があってもおかしくはないと考える。

そこで城門がなぜ、渡来系の技術と考えるのだが、同じく朝鮮式山城として築城された大

野城・基肆城と同様、城門は単独で存在するものではなく、土塁線にあり土塁と連携することで城としての機能を有する存在として城門ある。深迫門では城門を挟み込むように谷地形の中まで土塁が迫っており、その延長として城門が造られている。

城跡を考える上で重要となる定義の一つに、岡田茂弘氏²が示された「城跡」と判断する基準を、「防衛的構造物＝自由な出入を規制する施設の遺構の存在」とすると、城門と土塁の連続性に、強い防衛的思想を見だし、同じ構造を持つ大野城・基肆城と同様にこの当時の国内の築城思想から派生した施設ではなく、朝鮮式山城にルーツを持つ施設の在り方を見て取れる。

(3) 土塁線

鞠智城の土塁線として南側・西側土塁線が知られていること先述した。土塁と城門が組み合わせることにより、防衛的構造物としての城となる。さらに、この両土塁には、古代山城で始めて取り入れられた築城手法である「版築」技術が用いられており、城壁と呼ぶに相応しい中国・朝鮮半島の築城技法が発掘調査で明らかにされている。

南側土塁線は、堀切門跡から西方向に伸びる標高 120m～130mの丘陵頂部に位置し、総延長 500mの区間である。丘陵南斜面は、裾部との比高差が 20m～30mに及び、阿蘇溶結凝灰岩の切り立った崖を形成しており「屏風岩ライン」と呼ばれる地点も含んでいる。

また、西側土塁線は、長者原地区の西端（標高 155m）から北方向に伸び、標高 150m～170mの丘陵頂部に位置し、総延長約 500mの区間である。土塁線は馬の背状の尾根が、通称「灰塚」「涼みヶ御所」「佐官どん」といった頂を繋ぐように連続し南から北に徐々に標高を上げていく。発掘調査では「佐官どん」で版築土塁が確認されている。

(4) 貯水池跡

長者原地区の東側、米原集落の西に所在する谷部から、平成 8（1996）年に調査に着手し、国内の古代山城では、岡山県の鬼城山（史跡鬼城山跡・岡山県総社市）と鞠智城でしか確認されていない、城内に所在する貯水池を確認している。調査の結果、鞠智城では総面積約 5,300 m²に及び、池跡からは後に触れるが多彩な遺物も出土している。

古代山城における貯水池は、全 赫基³氏により古代山城の類例から古代朝鮮の山城における「集水遺構」と同遺構であるとし、池跡からの出土遺物の特徴とも合わせて、そのルーツは古代朝鮮の築城技術の一つとして捉えられている。

また、貯水池跡の調査では、堤防状遺構の断面から「敷粗築工法」とみられる低湿地における地盤を強化する技術も確認されている。この技術は鞠智城の先行し渡来系官人の指導により築城された記録の残る水城（特別史跡水城・太宰府市ほか）で、この技法が用いられ、軟弱地盤上に大堤が築かれている事例がある。

(5) 建造物等

鞠智城で確認されている長者原・上原地区からの検出数を合わせ、72 棟の建造物を確認しているが、うち 2ヶ所で八角形建物跡を 4 棟確認している。北側の 30・31 号建物では、心柱を中心に八角形状に配された柱が二重に巡り、掘建柱から礎石への建て替えが確認さ

れている。また、南側では、心柱を中心に八角形状に配された柱が三重に巡り、こちらも掘建柱から礎石への建て替えが確認されている。八角形建物は8世紀前半、鞠智城第Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられ官衙的役割を持つ建物群が立ち並ぶなど、当初の城と指摘機能から役所的機能へと変化する時期に当たっていたと考えられる。近年、多角形建物の検出は国内で官衙的性格を持つ遺跡等から数例の検出事例があるが、古代山城からの検出事例は鞠智城が初出である。

(5) 出土遺物

① 瓦

鞠智城では、軒丸瓦、丸瓦、平瓦の3種類の瓦が、大小の破片を含めて合計約1万900点出土している。軒丸瓦には、「単弁八葉蓮華文」と呼ばれる蓮の花をかたどった文様が施され、これは朝鮮半島の瓦文様の影響を受けたものと見られる。

② 銅製菩薩立像

銅造菩薩立像は、貯水池跡の池尻部から出土した。袖(下部の突起部分)を含む高さ12.7cm、幅3.0cmで、横から見ると体部がS字曲線を描いている。顔の表情は丸みを帯び穏やかで、三面の宝冠、肩まで垂らした垂髪、両肩にかけられた天衣などもよく表現されている。また、舍利容器と考えられる持物を、へその前で両手で抱えるように持っている。

この仏像は、7世紀後半の百済仏の特徴を持つことから、朝鮮半島の百済でつくられ日本に持ち込まれた可能性が高いと考えられている。

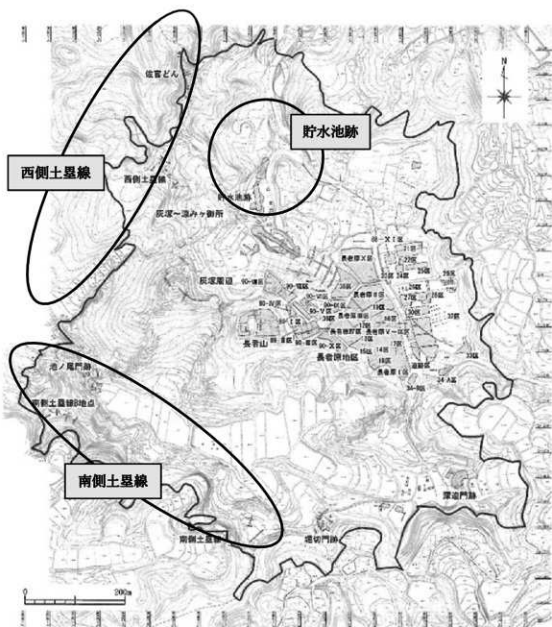
3 発掘調査から見てきた鞠智城に遡る渡来系技術

鞠智城に用いられている築城技術並びに出土遺物にはこれまでに多くの渡来系技術の存在が調査や研究から分かっている。特に鞠智城には国内の古代山城にはない八角形建物やこれも事例の少ない貯水池跡の存在などまだ、研究の余地を多く残す古代山城である。

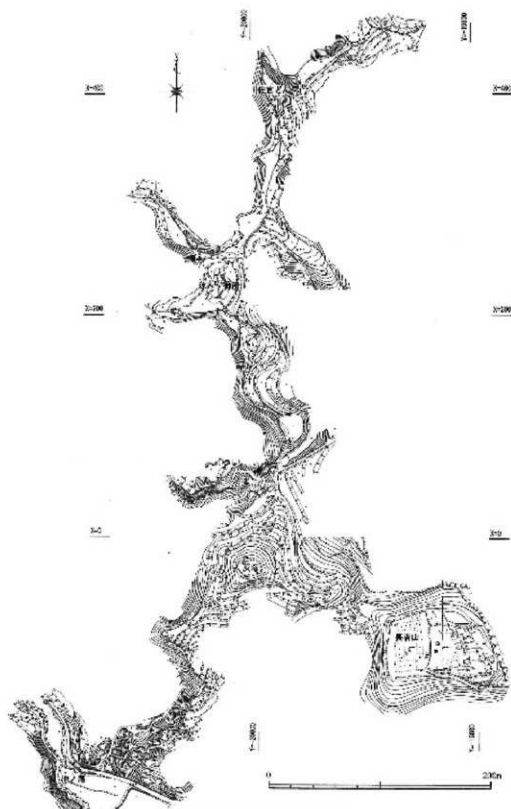
最後に、本県では、現在、海外から世界的な半導体受託製造大手の菊陽町進出が決まった。これほどの企業がなぜ、進出先として熊本を選地したのか。今回の事例が、これまで鞠智城がなぜ現在の山鹿市・菊池市に跨る米原台地を築城先として選地したのかに大いに考えさせられるきっかけを与えてくれた。

現在、進出先周辺は熊本県知事の判断により北側に大分方面と九州縦貫道とを結ぶ高規格道路の交通インフラの整備、また、熊本県、周辺市町村が力を合わせ長年整備してきた工業団地及びそこに進出してきていた国内関連メーカーの存在など、他地域に比べ進出すべき条件が整っていたことが熊本の地が選地された理由であると考えられる。

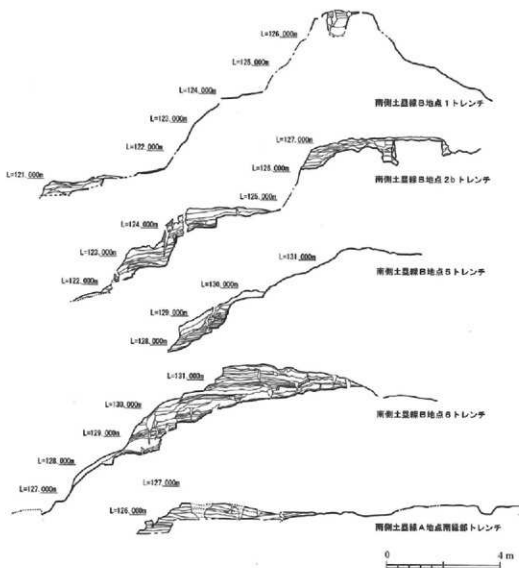
この在り方は、7世紀代に鞠智城が現在の山鹿市・菊池市に選地され、築城された経緯とも重複すると考える。車地など官道の整備、菊池川を中心とする河川交通の整備など大宰府との連携を目的としたインフラの整備が整っていたこと、これは今後の課題になるが、鞠智城が築城される7世紀代に周辺に鞠智城と連携を図る官衙的存在があったことが現在の鞠智城が選地された要因であると考えられる。



鞠智城跡各地区 遺構配置



西側土星線



南側土塁線トレンチ断面

【参考文献】

- ・ 『史跡鞠智城跡保存管理計画書』平成 27 年（2015 年）
- ・ 『第 3 次鞠智城跡保存整備基本計画』平成 28 年（2016 年）
- ・ 『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第 8 次～第 32 次調査報告－』平成 24 年（2012）
- ・ 『鞠智城と古代社会』第 1 号（平成 24 年度・2013 年度）～第 10 号（令和 3 年度・2021 年度）
- ・ 『築城技術と遺物から見た古代山城』－発表資料集－ 古代山城に関する研究会
平成 28（2016）年 熊本県教育委員会
- ・ 『鞠智城とその時代』－平成 14～21 年度「館長講座」の記録－ 平成 23 年（2011 年）
熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館
- ・ 『鞠智城とその時代 2』－平成 14～21 年度「館長講座」の記録－ 平成 26 年（2014）

年) 熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館

- ・ 『鞠智城跡Ⅱ』一論考編1ー 平成26(2014)年3月 熊本県教育委員会
- ・ 『鞠智城跡Ⅱ』一論考編2ー 平成26(2014)年11月 熊本県教育委員会

¹ 「朝鮮古代史からみた鞠智城」- 白村江の敗戦から単人・南島と新羅海賊の対策へ- 『古代山城 鞠智城を考える』鞠智城東京シンポジウム報告書 平成21(2009)7月

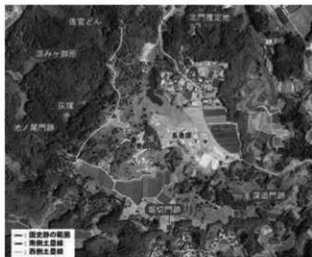
² 「古代山城としての鞠智城」『鞠智城を考える』2009東京シンポジウムの記録 平成22(2010)年 山川出版社

³ 「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」令和3年度鞠智城跡『特別研究』論文集

目 次

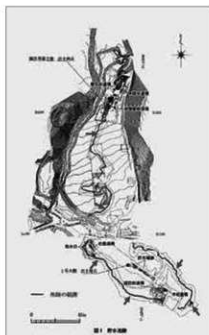
- 1 はじめに
- 2-1 鞠智城の貯水池
- 2-2 排水工・減勢工
- 2-3 浅い水域(自然流路を利用した曲池?)
- 2-4 貯木場
- 2-5 湧水の水汲み場(泉井)
- 2-6 鞠智城貯水池の再検討ー谷筋の空間構成
- 3-1 補強土工法
- 3-2 拡散する補強土工法
- 3-3 6-7世紀の百済の補強土工法
- 3-4 6-7世紀の新羅の補強土工法
- 4-1 新羅山城谷筋の利水と治水の空間計画
- 4-2 倭国古代山城水門付近の治水工
- 5 おわりにー谷筋の空間計画の系譜

1 はじめに



ころう君の将来の夢
鞠智城がもっと有名になること

- 鞠智城は東アジア的文化遗产
- 激励する東アジア情勢の証人
- 歴史的価値を高め、利活用を促進する学際的研究の蓄積がある
- 本報告は、貯水池とされる谷筋を分析して、鞠智城の土木技術系譜の一端にせまりたい



(矢野裕介2016『鞠智城の築造』[季刊考古学]136)

2-1 鞠智城の貯水池

(報告書の復元)

造成 谷筋を利用

範囲 水成粘土の堆積層から復元

面積 約5,300㎡

比高 南北約9m

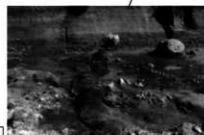
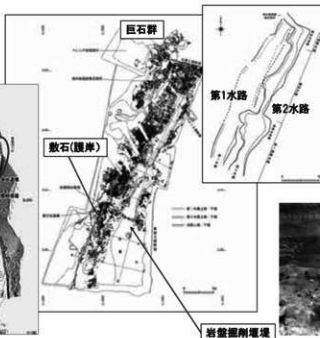
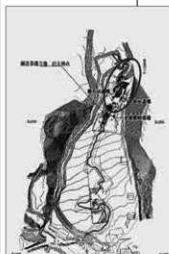
堤 堤を階段状に配置して貯水

施設 貯水池、貯木場

水源 主に湧水

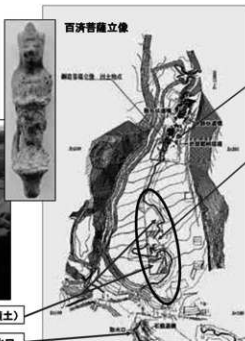


2-2 排水工 減勢工



2-3 浅い水域

底は不透水層
自然流路を利用した曲池？
水源 貯木場の余水
20次取水口



張り出し(地山成形・積土)

取水口

百済菩薩立像



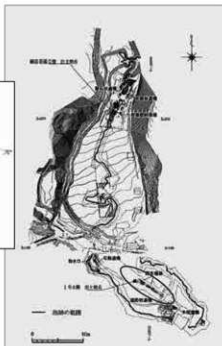
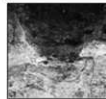
31次 トレンチ41
流水の影響のある沼沢地

24次 トレンチ40
流れの影響が少ない止水域



24次報告書
当該積土に古代の遺物(細かな時期は不明)を
包含しており、当該遺構は、創建当初からある一
定の時期を経て構築された可能性が高い
縄智城Ⅱ期に下る?

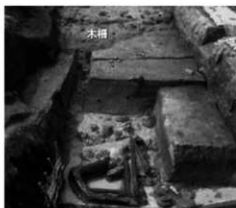
2-4 貯木場



出土地点
4層砂礫層

形状 谷底を帯状に利用する
構造 砂礫層(透水層)まで掘りくぼめて
湧水を確保し、建築材を貯木する
水源 湧水(表面湧出)
泉井の余水
取水口
時期 縄智城Ⅱ期を中心

2-5 湧水の水汲み場(泉井)



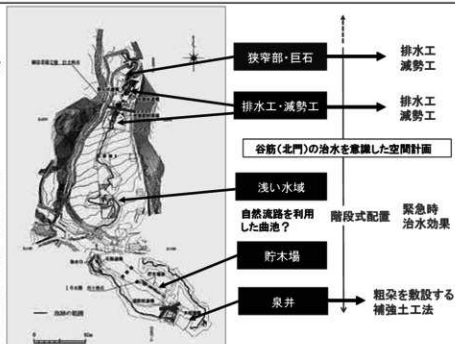
湧水池の木組み



- ・ 透水層まで掘削し、湧水を確保
- ・ 堰は、湧水池を区画する土手(道)
- ・ 土手の一部は、粗朶を敷設する補強土工法による
- ・ 木構は土留め工?

2-6 鞠智城貯水池の再検討

空間計画
谷筋の地形・地層にそくして
各施設を階段式に配置する

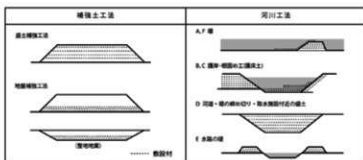


3-1 補強土工法

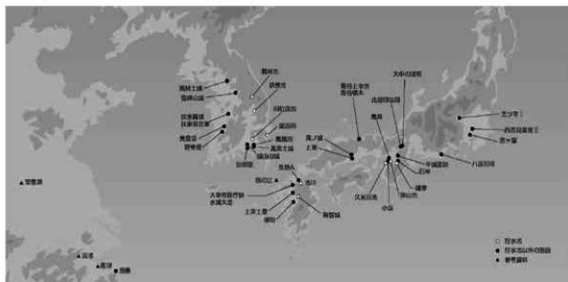
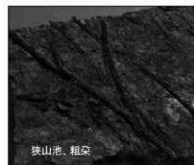
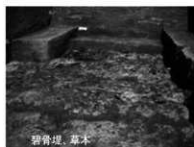
- 1 これまでの名称 数粗朶工法、敷葉工法、韓国：부엽공법、中国：敷草法
- 2 構造物 城壁、土塁、防水堤、池堤、道、整地
- 3 敷設材 粗朶、木葉、草本、樹皮、チップ、穀物の殻、骨片など
- 4 名称と機能

地盤補強工法 軟弱地盤の補強、地盤支持力を高める

補強盛土工法 土と補強材の相互作用により、盛土の安定性・強度を高める



(小山田堂-2018)



(小山田堂-2018を一部修正・加筆)

3-2 拡散する補強土工法

最古の事例
前4世紀頃
4-5世紀頃

良渚文化期、施島遺跡
中国江南一半島 益山黄堂堤
大朝-百濟 風納土城、堤川義林池、金堤碧骨堤

施畝遺跡 浙江省余姚市

第1期 河姆渡文化早期(前4700~前4500年)

第2期 河姆渡文化晚期(前3700~前3300年)

第3期 良渚文化期(前2900年~前2500年)

区画水田 稻田路(大畦畔)

22条・長20~200m・幅1~4m・間隔15~40m

ベース 淤泥層

敷設材 粗朶、竹 地盤補強



(報道写真)



([2020中国重要考古発見]2021)

黄登堤 全羅北道益山市

朝鮮時代 湖南3大貯水池(碧骨堤・訥堤)

古代 防潮堤?

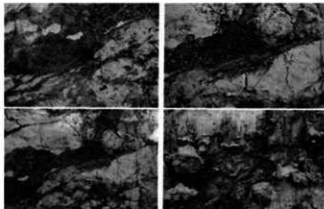
堤 基底部は現地表面から一約4.9m、幅約22m

敷設材 草木 地盤補強

AMS分析 紀元前4世紀頃



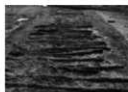
©Google



益山市・(財)全北文化財研究院2021「黄登堤堤防確認発掘調査報告書」

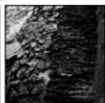
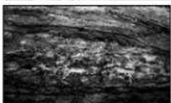
3-3

6・7世紀の百済の補強土工法



双北里／道／粗朶

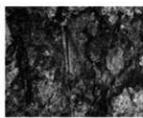
技術移転



扶余羅城東門付近／忠清南道扶余／6世紀



水城／福岡県太宰府市／7世紀／粗朶



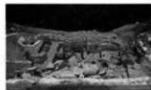
鬼ノ城の小水城
池／下敷布地の土塁／岡山県総社市／7・8世紀／粗朶

3-4

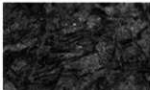
6・7世紀の新羅の補強土工法



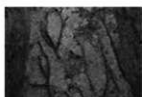
城山山城／慶尚南道咸安郡／6世紀中頃／草本・樹皮・木簡



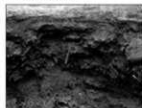
雷峰山城／京畿道利川市／6世紀後半／粗朶・樹皮



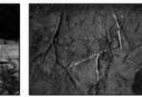
旧位良池 慶尚南道密陽市／6世紀前半／粗朶



蒜快池 慶尚北道尚州市／7世紀後半／粗朶



栗田洞堤防 蔚山広域市／7世紀末／粗朶



4-1 新羅山城谷筋の利水と治水の空間計画

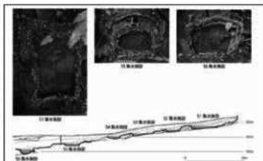
京畿道安城市 竹州山城／6世紀中～7世紀後半

勾配約七・六度の深流性の谷筋に、
石組護岸をめぐらす方形と楕円形の
五基の集水施設（S1～S6）を階段式に配置する



利水
浄水施設 沈澱を繰り返して浄水を見る

治水
減勢工 洪水時の谷を下る激流から
谷筋下流の城壁（東門）を守る

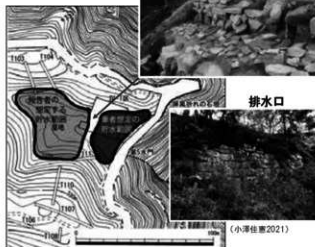


韓白文化財研究院
2012『安城竹州山城 2～4次発掘調査報告書』一部加工

4-2 倭国古代山城水門付近の治水工

鬼ノ城第5水門と土手状遺構1

鞠智城池ノ尾門跡



5 おわりに

1 谷筋の空間計画

施設	底面の土層	鞠智城時期区分
泉井	透水層	鞠智城Ⅰ期
貯木場	透水層	鞠智城Ⅰ～Ⅱ期
曲池？	不透水層	鞠智城Ⅰ～Ⅱ期
排水工・減勢工	不透水層	鞠智城Ⅰ期



平城京左京三条二坊宮跡庭園

2 谷筋開発の土木技術情報は、半島系情報の複合体

補強土工法(泉井の環)	鞠智城は、大野城・水城・基肄城などと同様の防御施設 → 百濟系情報
曲池？	鞠智城Ⅱ期とすれば、城内整備の一環？ 曲池は新羅系だが、山城には類例がなく、畿内を介した可能性が高い
空間計画	高句麗(平壤大城山城、5・6世紀)・新羅(竹州山城、6・7世紀)に類例

ご清聴ありがとうございました

おもな参考文献

- 小澤佳恵 2021 「山城で水をつかう—古代山城の水資源—」『大宰府史跡指定100年と 研究の歩み』
- 小山田宏一 2018 「古代日韓補強土工法の俯瞰的整理」『纏向学研究』6
- 主税英徳 2019 「日韓古代山城の水門構造からみた鞠智城」『鞠智城と古代社会』7
- 西住欣一郎 2014 「鞠智城跡貯水池跡について」『鞠智城跡Ⅱ—論考編1—』
- 矢野祐介 2016 「鞠智城の築造—貯水池・土塁を中心に—」『季刊考古学』136
- 全 赫基 2021 「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『鞠智城と古代社会』10
- (財) 韓白文化財研究院 2012 『安城竹州山城 2～4次発掘調査報告書』

1. はじめに

日本の建築文化を築き上げてきた技術については、寺院建築を中心に大陸からの影響は少なくない。古代建築と渡来系技術を考えるにあたって、まずは検討材料を見ておきたい。日本には世界最古の法隆寺金堂をはじめ、奈良時代以前の現存建築が約 30 棟弱と比較的多く残る。中国の唐代の建築が最古の山西省の南禅寺大殿（782 年）をはじめ、広仁王廟大殿・仏光寺東大殿・開元寺鐘樓の 4 棟に限られることと比べても豊富である¹⁾。いっぽうで、奈良時代以前の建築技術について、大陸との影響関係を論証するには日本・中国・韓国のいずれにおいても現存建築の数は不十分であると言わざるを得ない。また日本の現存建築もすべてが寺院建築という偏りがある。ただし、仏教や寺院建築は古代東アジアの共通の文化的基盤であり、技術伝播に大きな影響を与えたことに異論は少なからう。現存建築に加えて、発掘遺構・文献史料・絵画資料等から得られる情報も多く、これを補充している。このように研究資料は限られるが、古代建築と渡来系技術について、検討したい。

2. 建築の設計・技術と技術者・統率者

2. 1. 建築の設計と技術

そもそも建築の造営には造営計画の企画、場所の選定、建物の設計、労働力の確保など、準備には長い時間がかかる。また建物の設計においても、ごく一部の特殊な例を除いて、基本的には個別の設計が必要である。その設計に基づいて使用する木材量や作業に従事する労働量の算出、運搬経路の確保などの実務も膨大である。こうした準備を経て、造営は進捗する。それゆえに設計などを担う技術者と現場における施工を担う技能者の両面から伝播を考える必要がある。

また建築技術の伝播には、特殊性がある。工芸品とは異なり、実物の移動が困難な建築にあつては、デフォルメした模型や図像などによる技術の伝播、あるいは技術者自身の移動という経路を必要とする。さらに前者の場合、デフォルメする段階、そして受容側の解釈の 2 度にわたる伝播のハードルがある。デフォルメによる情報の喪失はもちろんだが、受容においても、正しい理解のないままの誤解や受容側の意図的な選択により、伝播の正確性を欠くことも少なくない。

こうした造営のフロー、技術伝播におけるデフォルメと受容における誤読・取捨選択を踏まえ、文献史料から知られる渡来系技術の伝来の様子を示す。そして個別の技術については、全体計画にあたる伽藍配置レベル、個々の建築技術から渡来系技術を検討したい。

建築の設計においては機能との関係が深く、寺院であれば宗教理念や僧の生活のための施設、宮殿であれば、政務・儀礼、生など、複合的な機能に応じて、諸施設は建てられる。

それゆえに同じ機能を有する施設であれば設計方法は類似し、比較検討が可能となる。伽藍配置や宮殿の構成、金堂や校倉など同じ機能を有した建築の比較が有効な指標となるのはそのためである。

また設計理念にも個々の部材の形から、建築全体の構成に至るまで、さまざまな尺度で違いがある。わかりやすい例でいえば、古代の柱間寸法を基準に設計する方法と近世の屋根構造から柱の位置を決める方法では設計理念が全く異なるのである。そして設計理念の具現化を技能が支えている。いっぽうで、設計理念や機能が異なっても、通底する建築技術は存在し、宮殿に用いられる技術と寺院に用いられる技術には共通点が多い²⁾。それゆえ、個々の建築技術に関しては、寺院建築の技術を基本に考えることに妥当性がある。

2. 2. 渡来系技術者と統率者

百済から仏教の公伝とともに、寺院建築ももたらされたが、礎石・瓦葺の建築はそれ以前の倭国の建築とは全く異なるもので、建築技術の移入なくして、建立は困難であったのである。そのため『日本書紀』によると、崇峻天皇元年(588)には仏堂を建てるために百済から仏舎利や僧とともに技術者が送られている。内訳は寺工2名、鐘磬博士1名、瓦博士4名、画工1名である。仏塔の相輪の露盤を造るための金属製品の製作技術、屋根を葺く瓦などは新しい技術は技術者の移動により、伝播したとみられる。技術者以外にも、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』の飛鳥寺建立に関する記述によると、金堂の「本様」が伝来したという。「様」は訓読みで「ためし」と読み、模型や設計図などとみられている。

こうした方法による技術の伝播は対外的なもののみとは限らない。『続日本紀』天平宝字3年(759)年11月辛未(9日)条の「領下国分二寺図於天下諸国。」とあるように、図による中央から地方への伝達を確認できる。ただし、国分寺をはじめ、国庁・郡庁・郡衙正倉など、同じ機能を有した建物であっても、明確な設計規格はうかがえず、その規範の精度は高いものではない³⁾。8世紀以降には木工寮を中心に渡来系技術者の数が低下し、その役割は低下したとも言われているが、依然として、指導的立場に渡来系技術者が確認でき、一翼を担っていた⁴⁾。

また渡来系技術者以外を含め、長官クラスの統率者やパトロンとの関係も大きい。古代山城でいえば、『日本書紀』によると天智天皇4年(665)8月に百済の武官の答体春初が長門の城、憶礼福留・四比福夫らが筑紫に大野城・基肆城を築城したことが知られる。同じく佐伯今毛人は造東大寺司長官などを歴任した造営関係の任官の多い人物で、軍事と造営の密接な関係も明らかになっており⁵⁾、怡土城造営にも従事している。天平勝宝8年(756)に怡土城の築城のため、大宰大貳の吉備真備が専当官に任官され、天平神護元年(765)に大宰大貳佐伯今毛人が築怡土城専知官に任官され、神護景雲2年(768)に完成した。この怡土城は中国式山城とされる。

これらの統率者と具体的な建築設計との関連は明確ではないが、怡土城に関しては8世紀であることもあるが、中国兵法に通じた吉備真備による影響とみられ、山頂から平地部にかけて広く囲む城郭を形成している。また山頂から尾根にかけての望楼などが設けられ、

大きな特徴が表れており、統率者と設計の関連がうかがえる⁶⁾。

3. 全体計画にみる大陸からの影響

伽藍配置 飛鳥寺・四天王寺・薬師寺もその伽藍配置から朝鮮半島との密接な関係がうかがえ、倭国と関係の深かった百済だけではなく、新羅・高句麗との関係も指摘されている。7世紀後半の東アジア情勢は混迷しており、660年に新羅によって百済が滅ぼされ、親交の深かった倭国は百済の遺民とともに663年に白村江の戦いに挑んだが、唐・新羅の連合軍に敗戦する。その後、新羅は668年には高句麗を滅亡させ、朝鮮半島を統一した。

こうした緊迫する東アジア情勢の中で、天武天皇9年(680)には天武天皇の発願により、藤原京に本薬師寺の造立が開始されたのであるが、この伽藍は双塔式の伽藍配置であった。この伽藍配置は百済や高句麗にはみられず、新羅にルーツがみられる。679年に創建された新羅の慶州四天王寺や684年の望徳寺が同形式の双塔式の伽藍配置である。これらの大陸と同形式の伽藍配置は新羅からの影響を示している。すなわち白村江の戦い以降の激動の東アジア情勢のなかで、新羅から迅速に情報を入手して最新の寺院建築の技術を導入していることを示しているのである⁷⁾。

同時期の寺院の伽藍配置では川原寺がある。川原寺は7世紀後半に齊明天皇の菩提を弔うために天智天皇によって建立されたとみられる。伽藍配置は一塔二金堂の特殊なもので、塔と西金堂を回廊で囲み、回廊は中金堂につながり、講堂はその北方に置かれた。この金堂と塔が向かい合う伽藍配置は、大宰府の観世音寺にも見え、天智天皇が齊明天皇の追善供養のために建てたとされる。後述のように、川原寺は齊明天皇の菩提を弔うために天智天皇によって建立されたとみられ、一塔二金堂の特殊なもので、廻廊が塔と西金堂を囲んで中金堂につながり、講堂はその北方に置かれた。この金堂と塔が向かい合う伽藍配置は、大宰府の観世音寺にも見え、天智天皇による齊明天皇の追善供養という点で共通する。すなわち対外的な関係性だけではなく伽藍配置も見えるのである。川原寺は出土瓦の観点から大陸との関連も指摘されるが、国内でのパトロンや統率者の影響がうかがえるのである。

このように寺院の伽藍配置は日本と大陸の交流の表出であり、その伽藍配置の類似性から大陸との交流の活発さや情報伝達の迅速さを看守でき、百済との親密な交流から新羅との交流へと変化したことがわかるのである。

藤原京と『周礼』考工記 朱鳥8年(694)に藤原京に遷都したが、その形状は当時参考にするべきであったであろう唐の長安と大きく異なる形状で、中央に宮殿が置かれる回字型であった⁸⁾(図1)。中国最古の技術書『周礼』考工記に記された理想の王城図の姿と酷似している(図2)。『周礼』は中国の経書のひとつで、戦国時代以降に周王朝の理想的な制度について記したものとみられ、このうち考工記は漢代に補われたものとされる。その構成は中心に宮城を置き、その南に宗廟・社稷、北に市を配するという都市計画を理想像として示している。この藤原京で当時の最新の都城である唐の長安を参照せず、『周礼』考工記の宮城を参考とした点には、唐からの直接的な情報入手の困難な状況がうかがえる。

和銅3年(710)に遷都した平城京では北闕型の都城で、さらに宮殿の北方に苑池を持ち、唐の長安の形状と類似する点も多い。また平城京を90度回転させて長安と比較すると規模はちょうど半分の大きさになる⁹⁾。慶雲元年(704)に帰朝した遣唐使による情報が平城京の建設に活かされたとみられ、唐との交流による影響の大きさがうかがえる。

移譲を踏まえると、理念的な側面の大きい配置計画については、朝鮮半島との関係が見えるのに対して、唐の影響は見出しがたく、藤原京のプランにも表れている。配置レベルの抽象的な概念では規範とすべき対象を唐に求めるには至っていなかった可能性もあろう。

4. 7世紀の多様な技術と技術伝播のルート

4. 1. 7世紀の建築技術

法隆寺 現存建築は限られるが、発掘遺構や出土部材を含め、7世紀の建築技術の多様性をうかがうことができる。7世紀後半に再建された法隆寺西院伽藍の諸建築をみると、高欄の卍崩しや人字型割束は初唐の李寿墓壁画に確認できる(図3)。ただしこのデザインは北魏(386~534)の雲岡石窟にも確認でき、法隆寺西院伽藍の大斗下の皿斗も北魏の壁画や石窟などによく見られる(図4)。つまり現在の法隆寺西院の再建は7世紀後半以降であるが、当時の最先端である初唐の様式ではなく、より古式なデザインで造られたのである。藤原京と同様に、法隆寺金堂が再建された7世紀後半には唐の情報を摂取できなかった可能性もある。もう一つの考えとしては、前身の若草伽藍の建築細部は不明であり、若草伽藍と西院伽藍の伽藍配置が異なることはもちろんであるが、前身建物を規範としたため、古式なデザインとなった可能性もある¹⁰⁾。なお法隆寺西院伽藍で見られる人字型割束は日本では展開せず、闘斗束が用いられており、ここにも大陸からの情報や技術をすべて受容するのではなく、取捨選択が確認できるのである。

山田寺 山田寺は7世紀半ばに造営を開始した寺で、山田寺東面回廊から出土した部材を見ると、法隆寺とは異なり、8世紀以降の唐の影響を受けた技術との共通点が多く見え、7世紀後半の技術伝播の様相がうかがえる(図5)。同時に8世紀以降の技術にはない特徴的な技術が見える。法隆寺では長押に軸擦穴を穿っているが、山田寺では、頭貫に藁座という扉の軸を受けるための材を別に付け、下部は地覆石に直接穴を打ってそこを軸擦穴としている。加えてこの山田寺から出土した肘木には一般の三斗を置く肘木よりも長いものが確認されており、この長い肘木は禪宗様組物の壁付の肘木にみられる(図6)。同じく山田寺では扉の軸を受ける藁座が出土している(図7)。これらの方法は日本の中世以降の中国南方からの影響とされる大仏様や禪宗様の技術と共通することから、中国南方系の技術との関係が指摘できる¹¹⁾。

四天王寺 四天王寺は推古天皇元年(593年)に造立が開始された寺で、出土した垂木の形状が特殊である。中世以前の入母屋造や寄棟造の現存建築をみると、屋根の垂木はすべて平行に掛かる形式である。これに対して、垂木を放射状に配する扇垂木木は、中世禪宗様、あるいは大仏様以降に広まった技術とされていた。ところが四天王寺の発掘調査に

より、放射状に垂木があったことが明らかとなった(図8)。この形式の垂木の出土は、山田寺の長い肘木や薬座と同じく。法隆寺や奈良時代以降の形式とは異なる建築技術の存在を示しているのである。

薬師寺 藤原京の本薬師寺の建築は不明であるが、平城京の薬師寺東塔は天平2年(730)の建立とされ、現存する。また伽藍配置は薬師寺と本薬師寺で酷似しており、双塔に関しても移築論争が起こるほど、両者の平面は酷似している。そのうえで、薬師寺東塔の特殊な技術を見ると、初層に両層閣額という頭貫の下に水平材が確認できる。この技法は古代日本では未確認であったが、唐では多く用いられる技法である(図9)。さらに薬師寺東塔の構造や意匠が白鳳時代の様式であることを踏まえると、本薬師寺の塔の上部構造は薬師寺東塔と同様であった可能性がある。そうであれば、唐の建築様式を7世紀後半に受容していたことになる。川原寺とともに、唐との関係を考えるうえで、重要な視座である。

倉庫の建築技術 現存する奈良時代の倉庫建築は六角形断面の校木を積層させた校倉で、この校倉には独自の設計方法が用いられている。通常の建物では柱間寸法を完数尺として設計しているが、校倉の場合は、桁行方向・梁間方向ともに一丁材の校木を組み上げて壁面を構成するため、柱間の総長を基準として設計している¹²⁾。校倉に関しては、5世紀の高句麗の麻綫溝1号壁画墓建築図に高床校倉式の双倉が描かれており(図10)、中国東北地方の農家の倉廩と同形式とされる¹³⁾。ここから校倉の建築技術は朝鮮半島経由で寺院建築とともに伝播した可能性がうかがえるが、その設計手法は金堂などの柱間設計の建物と大きく異なる。また校倉造や高床建築については、雲南省西北部の少数民族の校倉造が報告されているほか¹⁴⁾、中国の高床式住居の分布に関する報告がなされている¹⁵⁾。また雲南省出土の前漢代の出土遺物をみると、銅器や貯蔵具の描写に横木を積層させた切妻造の倉庫が確認できる(図11)前漢代の手法が高句麗に伝わった可能性も否定できないが、地理的、時間的に離れていることを考慮すると、別系統の可能性もある。

校倉以外の日本の高床建築についても、古墳時代以前の出土部材に貫状の材が貫通したとみられる柱がある。貫は中世以降の技術と考えられていたが、中世以降の寺院建築の技術とは異なる技術の系譜もうかがえる¹⁶⁾。この古墳時代以前の倉庫建築の技術も7世紀以降に刷新・滅失したわけではなく、集落の小規模な倉などで用いられた可能性がある。

このように日本の校倉の淵源がいずれであるかについて確固たる根拠は確認できず、高句麗、中国南方など複数のルートが想定されるが、こと高床倉庫については、校倉の描写にもとづいて正倉院正倉との関係性から朝鮮半島経由の寺院建築の技術と同ルートに限定する蓋然性は低い。同様に高床という点から南方系に限定することにも問題がある¹⁷⁾。むしろ古代日本の倉庫建築は諸国の正税帳によると、校倉とみられる甲倉のほか、板倉・丸木倉・板甲倉など多様な形式の倉庫があったことが知られ、複数のルートから倉庫建築の技術がもたらされた可能性も想起しておく必要がある。

4. 2. 大陸からの技術伝播の多様性

8世紀以降の律令体制が整った時期の現存建築では、細部の意匠を含めて独自の多様性

が失われ、画一的になる。その傾向は平安時代以降にも引き継がれ、地方に現存する平安時代の建築も中央に残る建築との類似点も多く見られる。これに対して、上記に示したように7世紀の建築事例からは、多様な技術の存在が確認でき、そこには画一的ではない大陸からの技術伝播のルートがうかがえる。

古墳時代以前の高床建築に用いられた貫のように、歴史のなかで後世に失われた建築技術もあった可能性があり、山田寺の横に広がる肘木もその証左である。飛鳥寺のような朝鮮半島からの技術とは別の南方系の技術がなんらかの形で入ってきた可能性を示している。

加えて倉庫建築に関しても、寺院建築と合わせて朝鮮半島経由で入ってきた可能性以外のルートも想起される。このように奈良時代になると官が技術者の掌握を試みるが、7世紀の段階には氏寺なら氏寺、法隆寺なら法隆寺というように複数の技術系統が混在していた様子が確認できる。それらの建築技術は画一的なものではなく、少なくとも4系統以上の技術系統があり、さまざまなルートを經由して入ってきたのである。

5. 古代山城の渡来系技術の課題

以上を踏まえ、古代山城の建築に関する渡来系技術を検討したいところであるが、ハードルは高い。ひとつは古代山城の全体計画に関する検討材料の不足である。古代山城の課題は土塁を中心とする外縁部に対する発掘や研究は多いものの、内部の構成に関する研究が進んでいないに点に古代山城研究の課題がある。この点では、中枢部の多くの発掘が進み、建物の配置や構成をうかがうことのできる鞠智城は貴重な存在である。

個別の建築・土木技術についても、版築を中心に土塁に関する検討は進んでいるが¹⁸⁾、こと建築については礎石・掘立柱併用建物に関する拙稿がある程度で¹⁹⁾、不足している。これも中枢部に及ぶ発掘調査が少なく、発掘遺構から建築技術について検討する土壌が形成されていないという状況に起因している。ここでは建築遺構のうち、比較的、発掘事例の多い倉庫と貯蔵施設をもとに、技術の系譜と受容のあり方について述べたい。

倉庫建築は大野城ほか、多くの古代山城で確認されており、古代山城の性格を考えるうえでも重要な建築であるが、倉庫建築は建築の標準設計や規格を考える貴重な材料である。例えば鞠智城では桁行4間、梁行3間の礎石建の総柱建物の数が多いが、これらの柱間寸法は6.5～8尺と一定ではない。ある程度、軸線を揃えた建物配置がみられるが、大野城ほど厳密ではない。こうした状況から、大野城や基肆城では大宰府、あるいは中央、渡来系技術者などとの関連性を強く窺える規格性や施工精度の高さが確認できるのと比べ、鞠智城は在地技術、あるいは肥後国の系統の技術など、異なる技術系譜によるものであった可能性がうかがえる。

そして倉庫の建立に関して、建立時期に関する視点を欠いてはならない。同時期に高い規格性と計画性をもって建立されたのではなく、随時、増設された可能性も考慮しておくべきであろう。これは遺跡や建物について、計画時の社会状況と施工時、あるいは完成時の社会状況が異なる可能性を秘めているためである。古代山城としての機能や計画が十全

であったのであれば、その遺構の範囲を固めて、集中的に検討することが遺跡の性格の解明につながりうる。逆に時代が下ってからの付加であれば、古代山城としての機能が変質したのちの状況を遺構が示すことになる。それゆえに、倉庫群の存在から、古代山城が備蓄の機能を有するようになったことは確かであろうが、計画当初の機能をうかがううえで、やはり周辺部ではなく、より多くの古代山城で中枢部の発掘の進展が不可欠であろう。

渡来系技術とのかわりでは、古代山城と朝鮮半島の山城の関係性を考えるうえで、地下貯蔵施設について触れておきたい。申鐘国による朝鮮半島における地下貯蔵施設に関する研究²⁰⁾では、木椽型貯蔵施設について論じている。これによると、洪城神衿城1基、宮北里百濟遺跡5基、大田月坪洞遺跡1基、錦山栢嶺山城1基の事例をあげ、百濟時代の山城において、長方形の堅穴を掘る地下貯蔵施設の存在を指摘する。これらの用途としては、倉庫や果実貯蔵庫・貯水用などの可能性が考えられており、建築部材が出土した事例もある。宮北里遺跡3号木椽施設では貯蔵物品の果実とともに、直径0.5cm程度の枝状の木材が重なって出土している。また月坪洞遺跡の木椽では木椽施設の架構に使用された楔、角材、板材、道具の柄等が出土している。これらの出土遺物は鞠智城の貯水池出土の部材と共通する点も多い。こうした朝鮮半島の山城にみられる木製の地下貯蔵設備は、日本では確認できず、鞠智城の貯水池においても、地下の構築物は確認できない。この点は日本列島の古代山城の造営にあたって、朝鮮半島の山城をそのまま受容するのではなく、選択的受容がなされたことを示している。

また鞠智城の八角形遺構である30・31・32・33号についても(図12)、遺跡の性格や渡来系技術との関わりを検討する重要な遺構である。古代の現存建築をみると、貴人を祀る廟所の表現として八角形平面が用いられている²¹⁾。上野邦一は日中韓、ベトナムの八角形遺構と比較検討し、これらを祭祀に関わる遺構と推定しているが²²⁾、祭祀であるとする、やはり古代山城の機能との関係を踏まえる必要がある。もし望楼や鼓楼などのように古代山城に必要な機能であれば、形状は異なっても他の古代山城でも同様の施設は発見されるであろうし、八角形遺構が発見されないのであれば、機能はともかくとして、少なくとも八角形の建築は必須ではないと判断される。また同氏は渡来人の関与を指摘するが、渡来人と関係の深い祭祀遺構の場合、古代山城の経営そのものとの関わりも考慮する必要がある²³⁾。いずれにせよ、鞠智城は中枢部の広範囲の様相が明らかになっているが、他の古代山城と比較可能となることで、より一層、その特質が明らかになるのである。

6. おわりに

以上のように、7世紀の建築技術については、画一的ではなく、多様なルートからの伝播が存在する。そして寺院建築の技術伝播以前の技術もすべてが刷新されたわけではなく、存続したものもあったとみられる。技術伝播にあっても、渡来系技術のすべてを規範とするのではなく、選択的受容がなされた可能性もある。古代山城の建築技術に関しては、こうした状況を踏まえたうえで、構造・意匠を含む建築設計などの高次の技術と加工など

の技能レベルの両面から技術の素地を検討する必要がある。そのためには、より多くの古代山城で中枢の発掘調査が期待され、遺構から建築技術の比較検討を重ねることで、鞠智城の遺構の特質も見えてこよう。

注

- 1) 以前は天台庵も唐代末の建築とされていたが、近年の調査により、建立年代が五代に下るとされる。
- 2) 木工寮から派遣された技術者が造宮省や造東大寺司に従事したことが知られる。また現存建築でも、平城宮東朝集堂が唐招提寺講堂に移築されており、法隆寺伝法堂は橘夫人の住宅を移転したもので、前身建物の様子が明らかになっている。これによると、寺院建築と宮殿や恒久住宅の技術に共通点が多いことが明らかになっている。
- 3) 海野聡「地方官衙政庁域の建築の格式と荘厳—国庁・郡庁正殿・国分寺金堂の比較から—」『地方官衙政庁域の変遷と特質』クバプロ、2018年、「遺構からみた郡庁の建築的特徴と空間的特質」『郡庁域の空間構成』2017年ほか。
- 4) 海野聡『奈良時代建築の造営体制と維持管理』吉川弘文館、2015年。
- 5) 注4前掲書。
- 6) 後述のように、川原寺にもパトロンや統率者の影響がうかがえる。
- 7) 海野聡『建物で見る日本の歴史』吉川弘文館、2018年。
- 8) 小澤毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003年。
- 9) なぜ回転させるのかが不明であり、大きさを半分とするにしても、長安の正確なサイズの把握や伝播の方法も不明である。また平城京には東部に張り出し部を持つため、長安とは形状は異なる。
- 10) 日本では興福寺のように前進建物を規範として再建される慣例がある。また7世紀後半には伊勢神宮においても式年遷宮の制が定まっている。
- 11) 海野聡「混在する技術——7世紀の寺院と飛鳥の宮殿」『日本建築史講義』学芸出版社、2022年ほか。
- 12) 海野聡「古代日本における倉庫建築の規格と屋根架構」『日本建築学会計画系論文集』682、2013年。校倉をはじめとする倉庫は律令制下で多く必要であったため、校倉の規模を規格化することは大量生産に有効であったのであろう。実際に手向山神社宝庫と東大寺本坊経庫は桁行30尺、梁間20尺と同じ規模であり、総長によって校倉を規格化している。
- 13) 関口欣也「朝鮮三国時代建築と法隆寺金堂の様式的系統」『江南禅院の源流、高麗の発展』中央公論美術出版、2012年。
- 14) 稲葉和也「雲南省に見られる校倉造の源流について：漢代建築の復元的研究 その12」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1990年。
- 15) 周達生「中国の高床式住居：その分布・儀礼に関する研究ノート」『国立民族学博物館研究報告』11-4、1987年。
- 16) 貫の技法に着目し、中世以降の技術とされるのは同高の貫であることを明らかにしている（海野聡「中世興福寺の伽藍復興に見る建築の（復古）思想」『建築におけるオリジナルの価値』日本建築学会、2020年）。

17) 浅川滋男も同様の見解を示している(『高倉の民族考古学』『住まいの民族建築学 江南漢族と華南少数民族の住居論』建築資料研究社、1994年)。

18) 向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2016年ほか。研究史の整理をしたうえで、見せる城としての役割を示している。この指摘は建築の意匠面を強調したもので、平城宮朱雀門前の空間構成との共通点もうかがえる。

19) 海野聡「鞠智城の遺構の特徴と特殊性—建物の基礎構造と貯木場を中心に—」『鞠智城跡Ⅱ-論考編』2014年。

20) 申鍾国「百濟地下貯蔵施設の構造と機能に対する検討」『文化財38』2005年。

21) 海野聡「寺院建築と古代社会」『古代寺院 一新たに見えてきた生活と文化—』岩波書店、2019年

22) 上野邦一「鞠智城の八角形遺構について」『古代学』8、2016年。鞠智城以外の古代山城との比較が必要としつつ、「八角形遺構で行われた祭事も、渡来人が関わった可能性があることを指摘しておきたい」とする点は傾聴に値する。

23) むろん、建築の技術的な伝播においては、理念の理解がないままに形のみを移入することも少なくないため、鞠智城の八角形遺構が祭祀施設であった場合でも、理念的な継承がなされていない可能性も想定しうる。

図版引用・出典

図1:『図説平城京事典』終風舎、2010年_p.21

図2:小澤毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003年、p.221、第20図

図3:傅嘉年主編『中国古代建築』第2巻、西晋、南北朝、隋唐、五代建築、中國建築工业出版社、2001年、p.454、図3-4-21

図4:海野撮影

図5:『山田寺出土建築部材集成』奈良文化財研究所、1995年、p.40、Fig.50

図6:『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、本文編、2002年、p.422、Fig.157、p.423、Fig.158および同、図版編、2002年、Ph.256。

図7:『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、本文編、2002年、p.459、Fig.167

図8:『四天王寺』埋蔵文化財発掘調査報告6、文化財保護委員会、1967年、p.194、第87図

図9:左 奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存事務所編『国宝薬師寺東塔修理工事報告書』図版編、2021年、第152図

右 傅嘉年主編『中国古代建築史』第2巻、西晋、南北朝、隋唐、五代建築、中國建築工业出版社、2001年、p.379、図3-1-19

両図に海野加筆。

図10:関口欣也「朝鮮三国時代建築と法隆寺金堂の様式的系統」『江南禪院の源流、高麗の発展』中央公論美術出版、2012年、241p、図163

図11:刘叙杰主編『中国古代建築史』第1巻、原始社会、夏、商、周、秦、汉建築、中國建築工业出版社、2003年、p.618、図5-212

図12:『鞠智城Ⅱ』熊本県教育委員会、2012年、p.66、第32図及びp.67、第33図。

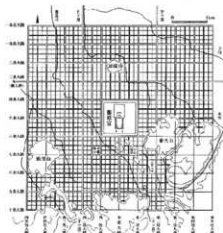
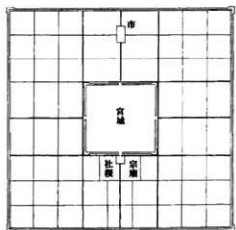


図1 『周礼』考工記による理想の王城図(載吾三による) 図2 藤原京の条坊復元



図3 李寿墓に描かれた人字割束 図4 雲岡石窟にみえる皿斗付の斗と人字割束

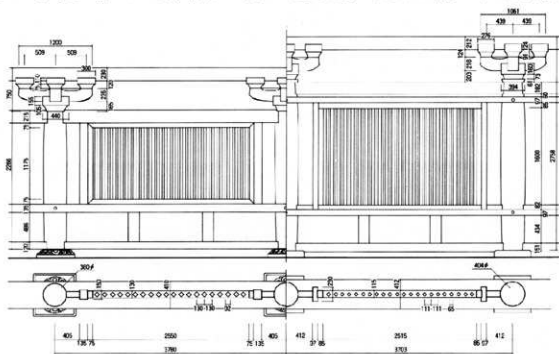


図5 山田寺回廊と法隆寺西院廻廊の比較

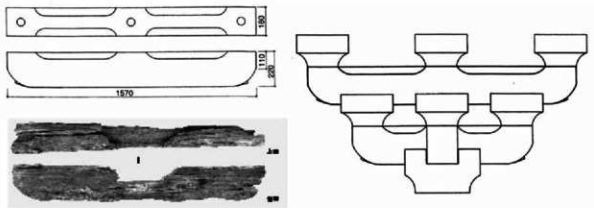


図6 山田寺出土の長い肘木

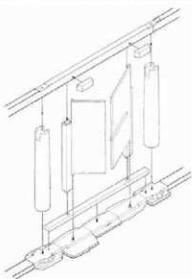


図7 山田寺回廊の扉廻りの構成

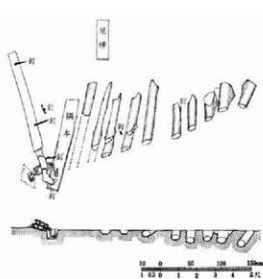


図8 四天王寺出土の垂木

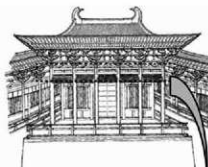


図9 薬師寺東塔（左）と懿德太子墓（右）の両層閣額

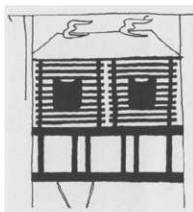


図10 麻綫溝1号壁画墓建築図



(巳) 井干式结构
云南晋宁县石寨山铜器



(庚) 井干式结构
云南晋宁县石寨山铜器上花紋

図11 雲南省出土遺物にみえる前漢代の校倉

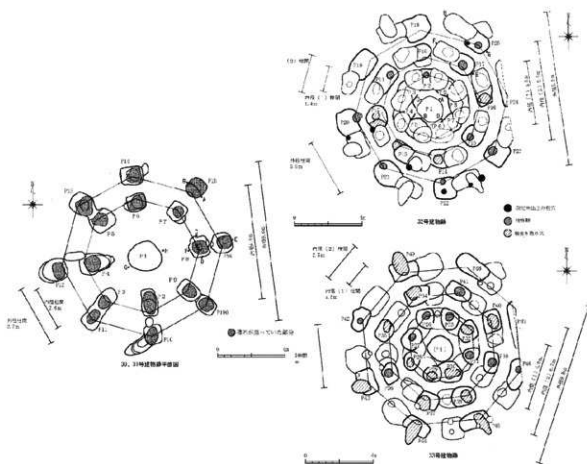


図12 鞠智城の八角形遺構

はじめに

日本（倭国）は、中国を核とする漢字文化圏の一員として（ほかに朝鮮・ベトナム）、第一に中国の文字である漢字、第二に政治思想としての儒教、第三に政治制度の基礎としての律令法、そして第四に中国で翻訳された漢訳仏典に基づく仏教を受容してきた。漢語・漢文を利用することで、国内外の意志疎通を可能とし、文明社会に入ることができた。これら四項目は、先進に位置する中国で発展してきたものであり、列島人にとって外來の文化・宗教・思想であった。そして漢字から平仮名・片仮名を発明し、日本語表記を身につけて、日本の文化を発展させていった。

また、社会生活に大きな影響を与えた文物・手工業製品・埋葬施設としての横穴式石室、鍛冶、須恵器、馬の輸入などをあげることができる。その技術を持つ人々の渡来とともに、日本列島に伝わった。とりわけ鍛冶・須恵器・馬はヤマト王権にとって重要であり、陶邑など河内地域に生産基地が設けられた。そして、倭人の墓制・死生観の変化、製造技術の発展、交通の展開に大きな影響をもたらし、ヤマト王権の発展に寄与した。こうした意味で、渡来系技術の導入は列島社会の発展になくてはならないものであった。列島の倭人は、旧來の文化・技能をもとに、こうした新制度・技術を利用しながら、日本的社会を展開していったことになる。

さらに、社会制度の仕組みとして、5世紀の^{ひろくせい}人制、6世紀の部民制、7世紀の官司制と評制（後の郡）施行、後半の律令制の導入をあげることになる。王権の社会的職能体制の構築や、地域行政組織の展開、そして律令制国家の形成など社会編成や国家の枠組みなどに利用しながら、日本独自の法制・社会制度を整備していったのである。

そして7世紀後半にあたる天智2年(663)、白村江において倭・百濟軍は唐・新羅連合軍に大敗する。敗戦後の列島に、西日本防衛ラインが一時的に構築された。渡来した百濟官人の達率答^た春初を長門、達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣し、「長門城」・大野城・基肆城を築城した。おそらく選地・設計、監督が主たる任務と思われる。なぜか、この3城にしか氏名の記載がない。達率は百濟の第二品であるが、答^た春初・憶礼福留の叙位は大山下で、大宝令制では従六位程度。天智10年における百濟系官人への授位の記載は、達率以上である。あるいは鞠智城の場合、大野・基肆城の築城開始以降の^{関与}の可能性もあるだろう。いずれにせよ、各地の山城建設に百濟系官人が派遣されなかったとは断言できないだろう。

本報告は、次のような構成で行ないたい。

一 渡来系諸技術の導入

1. 横穴式石室、2. 寺院建設と渡来系移住者、3. 百濟からの上番と移住

二 大宰府と鞠智城

1. 古代山城の築城、2. 筑紫の山城と百濟系官人、3. 百濟の王城と山城

三 肥後国と百濟

1. 大化前代の肥後と百濟、2. 古代山城と渡来系移住民、3. 大宰府と鞠智城

一 渡来系諸技術の導入

1. 横穴式石室

(1) 九州系横穴式石室

- * 4世紀後半
 - ・ 竪穴式石室の変容型
 - ・ 高句麗・百済の横穴式石室（扶余系）

* 肥後型横穴式石室

(2) 畿内型横穴式石室

- * 5世紀後半
 - ・ 大王墓では5世紀末葉か

* 百済系

(3) 渡来系技術

- * 石工集団 百済・加耶系
- * 水はけ技術

2. 寺院建設と渡来系移住者

(1) 寺院建立と百済

a 百済寺

- * 舒明11年7月条
 - ・ 「今年、大宮及び大寺を造作らしむ」とのたまふ。則ち百済川の側を以て宮処とす。是を以て、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。便に書直県を以て大匠とす」。

* 書直県

- ・ 倭漢書直県（皇極元年2月条）

b 飛鳥寺（法興寺）

- * 崇峻元年是歳条
 - ・ 「百済国、恩率首信・徳率蓋文・那率福富味身等を遣して、調進り、并て仏の舍利、僧、聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道嚴・令開等、寺工太良未太・文買古子、鐘盤博士將徳白味淳、瓦博士麻奈文奴・陽貴文・俊貴文・昔麻帝彌、面工白加を獻る。蘇我馬子宿祢、百済の僧等を請せて、戒むことを受くる法を問ふ。善信尼等を以て、百済国の使恩率首信等に付けて、學問に發て遣す。飛鳥衣縫造が祖樹葉の家を壊ちて、始めて法興寺を作る」。

(2) 東大寺大仏

a 國中公麻呂

- * 宝亀5年10月己巳条
 - ・ 「散位從四位下國中連公麻呂卒しぬ。本是れ、百済国の人なり。その祖父徳率国骨富は、近江朝廷の歳癸亥に次るとき、本蕃の喪乱に属きて帰化けり。天平年中、聖武皇帝弘願を發して盧舍那銅像を造らしむ。その長五丈なり。當時の鑄工、敢へて手を加ふる者無し。公麻呂、頗る巧思有り。竟にその功を成す。

芳を以て遂に四位を授く。官は造東大寺次官兼但馬員外介に至る。宝字二年、大和国葛下郡国中村に居るを以て、地に因りて氏を命す」。

3. 百済からの上番と移住

(1) 百済からの主な移住伝承 ⇒ 史料参照①

a 弓月君（秦氏伝承）

* 応神14年は歳条

・「是歳、弓月君、百济より來歸り」。

b 王仁

* 応神15年8月条

・「百济の王、阿直伎を遣して、良馬二匹を貢る。即ち輕の坂上の廐に養はしむ。因りて阿直岐を以て掌り飼はしむ。(略) 対て曰さく、「王仁といふ者有り。是秀れたり」とまうす」。

* 応神16年2月条

・「王仁來り。則ち太子菟道稚郎子、師としたまふ。諸の典籍を王仁に習ひたまふ。通り達らずといふこと莫し。所謂王仁は、是書首等の始祖なり」。

c 王辰爾

* 欽明14年7月条

・「樟勾宮に幸す。蘇我大臣稻目宿祢、勅を奉りて王辰爾を遣して、船の賦を教へ録す。即ち王辰爾を以て船長とす。因りて姓を賜ひて船史とす。今の船連の先なり」。

(2) 6世紀前半の百済と倭国の往来

a 『日本書紀』による主要記事

* ⇒ 史料参照②

b 主な特徴

* 百済からの軍事支援要請と倭国への博士上番

* 五経博士・易博士・曆博士・医博士・採薬師は中国南朝・梁の出身者

・姓は「段・高・王・馬・潘・丁」

・南朝 ⇄ 百济 ⇄ 倭国

* 百济官人には、倭系官人が含まれる

c 『隋書』百济伝（6世紀末～7世紀初頭）

* 「其の人（百济人）、新羅・高麗（高句麗）・倭等雜りて有り。また中国人有り」

(3) 白村江敗戦以降の百济人の移住

a 『日本書紀』による百济人の移住

1. 天智4年(665) 百姓男女400余人 近江国神前郡

2. 5年 男女2000余人 東国

3. 8年 男女700余人 近江国蒲生郡

* ⇒ 史料参照⑩

b 百済系官人への叙位

*天智10年正月是月条

冠位	人名	職務
大錦下	佐平余自信・沙宅紹明	法官大輔 (式部省)
小錦下	鬼室集斯	学職頭 (大学寮)
大山下	達率谷那晋首	閑兵法
	木素貴子	閑兵法
	憶礼福留	閑兵法
	答本春初	閑兵法
	本日・比子・贊波・羅金須	解薬
	鬼室集信	解薬
小山上	達率徳頂上	解薬
	吉大尚	解薬
	許率母	明五経
小山下	角福牟	閑於陰陽
	達率等50余人	

*特徴

- ・兵法関係者の授位が多い
- ・後の式部省・大学寮の官人
- ・薬劑の知識

(4) 律令法と史部

a 学令大学生条

*凡そ大学生には、五位以上の子孫、及び東西の史部の子を取りて為よ。若し八位以上の子、情に願はば聽せ。国学生には、郡司の子弟を取りて為よ。〈略〉並に年十三以上、十六以下にして、聰令ならむ者を取りて為よ。

*東西の史部

- ・倭漢(東漢)直
- ・西首

* ⇒ 史料参照③

二 大宰府と鞠智城

1. 古代山城の築城

(1) 西日本防衛ライン

a 白村江の敗戦以降の西日本防衛ラインの構築

*天智2年(663)、朝鮮半島の白村江において、「百済救援」をめざした倭と百済連合軍が、唐・新羅連合軍に大敗した。倭国では、唐・新羅による軍事的脅威が現実化し、対馬から瀬戸内海沿岸をとおり大和国に至る西日本防衛ラインを築く。

b 『書紀』の主要記事

1. 天智3年条

是歳、対馬島・宍岐島・筑紫国等に、^{きんりや}防と^{すずみ}烽とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯えしむ。名けて水城と曰う。

2. 天智4年8月条

達率答^た林春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率^た憶礼福留・達率^た四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽(基肆)、二城を築かしむ。

3. 天智6年11月是月条

倭国(大和国)の高安城・讃吉国山田郡の屋島城・対馬国の金田城を築く。

4. 天智8年8月条/冬条

天皇、高安嶺に登りまして、議りて城を^{おほ}修めむとす。なお、民の^あ疲れたるを^お恤みたまひて、止めて作りたまはず。／高安城を^お修りて、畿内の田税を^お收む。

5. 天智9年2月条

又、高安城を^お修りて、穀と塩とを^お積む。又、長門城一つ・筑紫城二つを築く。

6. 天武元年6月条 (壬申の乱)

筑紫国は、元より^あ辺賊の難を^お成る。其れ城を^あ峻くし^あ隍を深くして、海に^あ臨みて守らすは、^あ豈内賊の^あ為ならむや。

7. 天武8年11月是月条

初めて関を竜田山・大坂山に置く。よりに難波に羅城を築く。

8. 『続日本紀』文武2年5月条

大宰府をして大野・基肆・^つ鞠置の三城を^つ繕治^つわしむ。

9. 文武3年12月条

大宰府をして三野・^つ稻積の二城を^つ修らしむ。

*古代山城図 ⇒ 史料参照④

(2) 山城の変遷

a 稲田孝司説

*城壘列石・城門・水門等に用いられた石の加工方法・形態・構築方法等を主な分類基準とする。 ⇒ 史料参照⑤

b 赤司善彦説

*出土土器から消長を測る。 ⇒ 史料参照⑥

2. 筑紫の山城と百済系官人 - 憶礼福留・四比福夫

(1) 憶礼福留

a 天智4年8月条

*達率答^た林春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率^た憶礼福留・達率^た四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽(基肆)、二城を築かしむ。

b 履歴

*天智2年(663)9月甲戌条

・日本へ渡る

*天智4年8月条

・大野城・基肆城を築城

*天智10年正月是月条

・授位 憶礼福留〈兵法に関へり〉 大山下 (従6位)

*天平宝字5年(761)3月条

・憶頼子老ら41人に石野連を賜姓

c 石野連

*『新撰姓氏録』左京諸蕃

(2) 四比福夫

a 履歴

*天智4年8月条

・大野城・基肆城を築城

*神亀元年(724)5月辛未条 [渡来系移住民に賜姓]

・正7位上四比忠勇に椎野連を賜姓

b 椎野連

*『新撰姓氏録』になし

c 出身地

*酒泚城と関係する地名か

・大宰府と酒泚城

d 諸人物

*四比河守(右京人)、四比元孫(左京大属)、四比新紗(大和国智郡人)

*椎野連長年(万葉16-3822, 23)

3. 百済の王城と山城

(1) 四泚城と大宰府

a 四泚城

*四比城と扶余山城

・非常時の王城としての扶余山城

* ⇒ 史料参照⑦

b 大宰府

* ⇒ 史料参照⑧

(2) 百済の山城

a 土城と石城(石築)

*山城の二形態

b 亀田修一による百済と日本の山城比較

*規模の比較 ⇒ 史料参照⑩

三 肥後国と百済

1. 大化前代の肥後と百済

(1) 日羅と火葦北国造

a 日羅

* 敏達12年(583)7月丁酉条

・「今百済に在る、火葦北国造阿利斯登が子達率日羅、賢しくして勇有り。故、朕、其の人と相計らむと欲ふ」。

* 敏達12年(583)是歳条

・「杵隈宮御萬天皇(宣化)の世に、我が君大伴金村大連、国家の奉為に、海表に使しし、火葦北国造刑部阿利斯登の子、臣達率日羅、天皇の召すと聞きたまへて、恐り畏みて来朝り」とまうす。

* ⇒ 史料参照⑨

b 火葦北国造

* 肥後国の国造(国造本紀)

・火国造、阿蘇国造、葦分(葦北)国造、天草国造

* 葦北国造と百済との関係

* 前方後円墳がみられない地域

・国造と前方後円墳

(2) 江田船山古墳出土品

a 冠帽など

* 漢城期百済(『漢城百済博物館』)

b 古墳の被葬者と百済

* 「獲加多支爾大王世」(雄略天皇)の時代

c 肥後北部と南部

* 江田船山古墳は、後の玉名郡に所在

・葦北国造は、肥後南部(後の葦北郡)

(3) 筑紫と百済

a 筑紫君と火君

* 欽明17年正月条

・「百済の王子**恵**、罷りなむと請す。仍りて兵仗・良馬を賜ふこと甚多なり。亦頗に賞祿ふ。衆の飲み歎むる所なり。是に、阿倍臣・佐伯連・播磨直を遣して、筑紫国の舟師を率て、**衛**り送りて国に達らしむ。別に**筑紫火君**(百済本記に云はく、筑紫君の兄、火中君の弟なりといふ)。を遣して、勇士一千を率て、**衛**りて弥豆(弥豆は津の名なり)。に送らしむ。因りて津の路の要害の地を守らしむ」。

・筑紫君と火君との関係

b 筑紫火君と百済

* 欽明17年正月条

2. 古代山城と渡来系移住民

(1) 西日本の古代山城と渡来系移住民

a 葛原人説

*各山城と渡来系移住民

- ・石城山 百濟部
- ・鬼ノ城 加夜、漢部、史戸
- ・大廻小廻 土田、幡多
- ・城山城 綾
- ・永納山 唐子山、高麗池

*加夜氏や讃岐綾氏のもつ先進的な土木技術が築城に際して活用される。

b 筑紫の山城

*大野城・基肆城

*鞠智城

(2) 肥後国の氏族

a 主要な氏族名 (含推定)

玉名郡 日置部、日置部公

山鹿郡

菊池郡 大伴部、(秦人)

阿蘇郡 阿蘇君、鳥取

合志郡 壬生部、日下部、鳥取

山本郡

飽田郡 建部公(君)、春日部、私部

託麻郡 津守部

益城郡 山部、大伴君、宅部、肥公、真髪部(白髪部)

宇土郡 額田部君、額田部

八代郡 高分部、火君

天草郡

葦北郡 山部、刑部、日奉部、家部、他田部、真髪部(白髪部)、大伴部

球磨郡 久米部

b 特徴

*渡来系移住民

*葦北国造(火葦北国造・刑部叔部阿利斯登)と葦北郡

- ・刑部
- ・大伴部

3. 大宰府と鞠智城

a 大宰府と官人

*大宰府と鞠智城

b 肥後国と国司

【主要参考文献】

- * 赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」『月刊文化財』631、第一法規、2016
- * 稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』34、2012
- * 大阪府立近つ飛鳥博物館『横穴式石室誕生』2007
- * 小田富士雄『古代九州と東アジアⅡ』同成社、2013
- * 小田富士雄『天智紀』山城の出現とその背景『月刊文化財』631、第一法規、2016
- * 亀田修一「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3、1995
- * 亀田修一「瀬戸内の古代山城」『地域の古代日本 出雲・吉備・伊予』角川選書
- * 韓国考古学会編『概説 韓国考古学』同成社、2013
- * 九州国立博物館『九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集』2019～
- * 葛原克人「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』新人物往来社、1994
- * 熊本県教育委員会編『鞠智城と古代社会』2013～
- * 田中史生「律令制国家の政治・文化と渡来系移住民」『古代史をひらく 渡来系移住民』岩波書店、2020
- * 田中史生「古代文献から読み取れる日本列島内の百済系・中国系移住民」『百済研究』74、2021
- * 玉名歴史研究会編『東アジアと江田船山古墳』雄山閣、2002
- * 向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2017
- * 吉村武彦「ヤマト王権と半島・大陸との往来」『古代史をひらく 渡来系移住民』岩波書店、2020

【古代山城 年表】

- 660 斉明 6 9 唐・新羅による百済滅亡が倭国に伝わる。10 百済が倭国に救援を乞う。
- 661 斉明 7 5 斉明天皇が、朝倉橋広庭宮に遷る。7 斉明没。中大兄称制。
- 663 天智 2 8 白村江の戦いで大敗。
- 664 天智 3 5 唐使郭務棕が、表函・献物を進上する。この年、対馬島・宅嶋島・筑紫国等に防と椽とを置き、筑紫に水城を築く。
- 665 天智 4 8 答体春初を長門国に遣わし、築城。憶礼留留・四比福夫を筑紫国に遣わし大野・椽（基肆）の二城を築く。9 唐使劉徳高・郭務棕と禰軍（旧百済官人）が、表函を進上する。遣唐使派遣。
- 667 天智 6 3 近江大津宮に遷都。唐使が、遣唐使を筑紫に送る。11 大和高安城・讃岐国屋島城・対馬国金城を築く。
- 668 天智 7 1 天智天皇即位。9 新羅が調を貢納する。唐が高句麗を滅ぼす。この年、唐が倭国征討の船舶を修理するが、新羅攻撃かという（『三国史記』）。
- 669 天智 8 1 蘇我赤兄が筑紫率。冬に、高安城を修り、畿内の田税を収む。9 新羅が進調。この年、遣唐使を派遣。唐使郭務棕ら2000人が遣わされる。
- 670 天智 9 2 戸籍（庚午年籍）を造り、盗賊・浮浪を断つ。高安城を修りて、穀と塩とを積む。また長門城一つ・筑紫城二つを築く〔重出か〕。8 新羅が高句麗王を冊立〔唐・新羅の対立〕。9 遣新羅使。

- 671 天智10 1 冠位・法度を施行（「近江令」の存否）。唐使が上表。憶礼福留・答本春初に大山下を授位。12 天智天皇没。
- 672 天武 1 6 壬申の乱。大海人皇子が近江朝廷軍を破る。
- 673 天武 2 2 大海人皇子が即位（天武天皇）。
- 675 天武 4 2 天武が高安城に行幸する。3 栗隈王を兵政官長とする（栗隈王は壬申の乱時に筑紫大宰）。10 畿内の諸王・有位者に武装させる。〔676, 679, 684, 685, 693, 699, 700〕
- 676 天武 5 2 唐が朝鮮半島支配を放棄する。
- 679 天武 8 11 難波に羅城を築く。
- 683 天武12 11 諸国に詔して、陣法を習わせる。
- 685 天武14 11 軍用の楽器・兵器の私家所蔵をやめ、郡家に収める。
- 686 朱鳥 1 9 天武天皇没。持統皇后称制。
- 689 持統 3 6 浄御原令施行。戸籍作成（庚寅年籍）。兵士への武事教習。9 石上麻呂・石川島名らを筑紫に遣し、位記を給送する。また新城を監す。10 天武が高安城に行幸する。
- 690 持統 4 1 持統天皇即位。
- 693 持統 7 12 諸国に陣法博士を遣わし、兵法を教習させる。
- 694 持統 8 12 藤原宮遷都。
- 698 文武 2 4 南島に使を遣わし、国をもとめさせる。5 大宰府に、大野・基肆・鞠智三城を繕治せしむ。8 高安城を修理する〔天智5年築城〕。
- 699 文武 3 9 天武が高安城に行幸する。11 南島より帰る。12 大宰府に、三野・稲積二城を修せしむ。
- 700 文武 4 6 筑紫惣領に、覓国使を脅迫した薩末比売、衣評督・助督、肝衝難波を処罰させる。〔覓国使は698年の遣使か、新たな遣使か〕10 筑紫惣領・大弐を任ず。
- 701 大宝 1 8 高安城を廃す。大宝律令完成。
- 702 大宝 2 8 命に逆らう薩摩・多撫を征討し、戸を校へ吏を置く。〔国司・島司〕10 唱吏国司ら「国内要害の地に柵を建て、戍を置きて守らむ」と言う。
- 712 和銅 5 1 河内国高安峰を廃す。
- 713 和銅 6 4 大隅国を置く。
- 718 養老 2 養老律令（施行は757年〈天平宝字1〉）
- 719 養老 3 12 備後国安那郡茨城、蘆田郡常城を停する。
- 756 天平勝宝8 6 怡土城を築く。
- 765 天平神護1 3 大宰大弐佐伯今毛人を築怡土城専知官、少弐采女浄庭を修理水城専知官とする。

⑤

出土土器からみた古代山城の時期消長表

学史的 な分類	山城名	時 期			
		7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
前期式山城	大野城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	基峰城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	金田城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	高安城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
関戸内 (津波式)山城	柳野城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	大瀬小瀬山城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	尾ノ黒		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	瀬崎城山城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	水野山城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
九州の (瀬戸式)山城	石塚山城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	柳野ノ谷城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	阿志城山城		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	高丸山神籠石		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	雷山神籠石		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	高丸山神籠石		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	雲山神籠石		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	藤毛山神籠石		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	柳原山神籠石		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	おつぼ山神籠石		■■■■■	■■■■■	■■■■■
	肥後山神籠石		■■■■■	■■■■■	■■■■■
藤原山城		■■■■■	■■■■■	■■■■■	
備 考		備出土遺物などからみて確実 出土地物はあらかず少量であること 不詳			

(赤司善彦 図)

⑤

第1系統	第1段階 第2段階 第3段階 ・金田城 (667)
第2系統	○大野城1期 (665) ○水城 (664) ○基峰城 (665) ? ○藤原城 (698以前) ? ・藤原城 (667) ? □尾ノ黒 □藤崎城山城 □瀬崎城山城 ? ・大瀬小瀬山城 ・水野山城
第3系統	・阿志城 ・雷山城 ・柳野ノ谷城 ・高丸山城 □石塚山城 ・女山城 ・花木城 ・おつぼ山城 ・雲山山城 ・藤毛馬城 ・藤原城
備内	○川原宮 (655) ? ・高安城 (667) ? ◎藤原宮 (694)

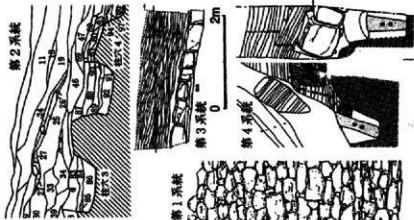
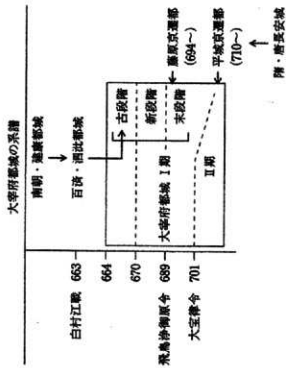


図4 古代山城の地盤系統と築造開始時期推定
○内注形石籠石段
□内注形石籠石段
◎石籠石門礎又は無し。
() は「日本書紀」に基づく年代。右図は峰島の外圍立面で、第1系統：石塚(金田城)、第2：石村不用土器(大野城)、第3：新石列石土壘(大瀬小瀬城)、第4：初石列石土壘(柳野ノ谷城)。各報告書図を改変。
(稲田孝司 図)

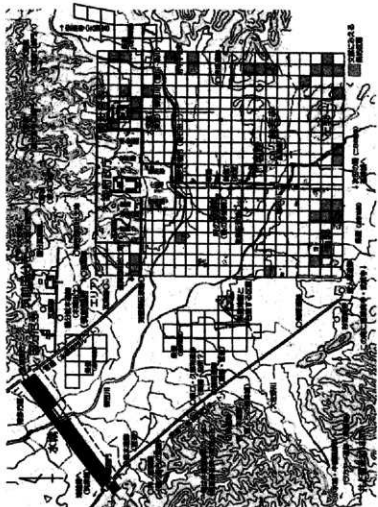


(概説 韓国考古学)



(小田富士雄 図)

⑧



(井上慎正 図)



(國史大辞典)

① 日本古代山城比較表

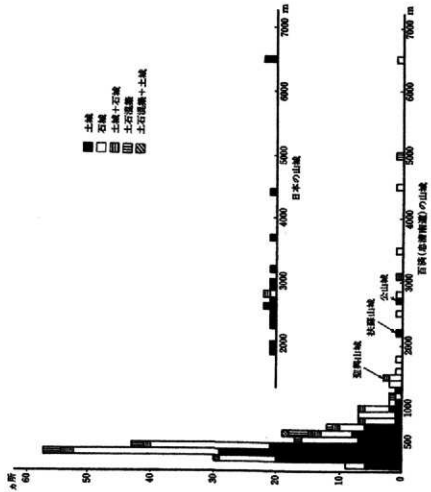


図2 百濟と日本の山城の大きさと数

(亀田修一図)

鞠智城シンポジウム発表要旨2022

渡来系技術から見た古代山城・鞠智城

発行年月日 令和4年(2022年)10月23日

編集 歴史公園鞠智城・温故創生館
〒861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原443-1

発行 熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷 サンコーコミュニケーションズ株式会社
〒860-0031 熊本市中央区魚屋町2-5 サンコミビル



歴史公園鞠智城・温故創生館は開館 20 周年を迎えました。

鞠智城シンポジウムの過去の発表要旨や成果報告は、奈良文化財研究所が運営するホームページ「全国遺跡報告総覧」から無料ダウンロードできます。

「全国遺跡報告総覧」はこちら [☞ https://sitereports.nabunken.go.jp/ja](https://sitereports.nabunken.go.jp/ja)

正誤表

箇所	誤	正
3 頁、下から 8 行目	十蓮寺遺跡	十蓮寺遺跡

この電子書籍は、渡来系技術から見た古代山城・鞠智城 鞠智城シンポジウム発表要旨 2022 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：渡来系技術から見た古代山城・鞠智城

鞠智城シンポジウム発表要旨 2022

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 11 月 1 日